



私たちの専門性



前川 良太

アトムつばさでは両園合同で半期に一度、自分たちの仕事を振り返る総括会議を行っています。その総括会議にゲスト講演に一麦会(麦の郷)野中さんをお招きしました。障がい者の就労や引きこもりの人たち居場所づくりなど、様々な福祉事業を行う麦の郷とアトムは昔から縁があります。それは何より目の前の人の困りごとに寄り添うところから、ともに生き合う社会を目指すという共通の目指すべき目標があるからです。そんな野中さんの話の中で印象的だったのは「アトムの皆さんはアトムの職員であってほしい」という言葉でした。アトムにはアトムにしかできないことがあるという激励と同時に「あなたたちの専門性は？」と問われた言葉でした。この夏いろいろなところに出向いて、その度にアトムらしさを外側から応援してくださる方とたくさん出会いました。だけど私たちの日々はもっと混沌としていて、迷いながらの毎日です。そんな私たちに、改めて「私たちの専門性とは何か」という問いとヒントをいただけた総括会議でした。私たちの専門性とは何でしょうか。もちろん保育のプロとしての視点もあるでしょう。だけど本当にそれだけが私たちの果たしていかないといけないことなのでしょうか。

総括会議の前日は、第3回の語る会でした。10 家庭の保護者と職員で、保育士のモヤっとすることを出発点に話をしました。不適切保育の報道にモヤっ。衣類に名前がなくて誰のかわからなくなりモヤっ。些細なことや、現在進行の保護者とうまくいかない関係に悩む…など普段なかなか自分たちのモヤっを話さない保育士たちは、こんなこと言っているのだろうかとは実はドキドキしながら話していました。だけど実際は、不適切保育の話題では「親でもきつく言うてしまうことあるのに、保育士はあかんってどうなん？」とあつけらかんとした返事が返ってきたり、保育士の悩みにも「なんでもっと早く相談してくれへんかったんよ！」と思ってもいなかったことを話す保護者もいたり、お互いの立場をぴよんと飛び越えて踏み込んで発言するのは私たち職員ではなく、むしろ保護者の方でした。昨年度の出来事から、再び“ともに”つくる保育園にということに職員も保護者も一緒に立ち返ったところ。だけどなかなか実感結びつかないところに私たちは焦りを感じていました。そこで「保育士のことどういう存在だと思ってる？」と投げかけたところ「うーん、第2の母やな！」と言うお母さんの発言に、うんうんとほかの保護者もうなづくのでした。加えて、「こんなに考えてくれる保育園はない。」だからそれはもう第2の母だと言うのです。保育のプロとして、悩みも話さずきちんとした保育をと気負う私たちですが、保護者の人たちが安心していたところは「一人の人間」としての私たちだったのです。私たちが「どんな相手か」と問うたつもりが、実はそのことを問われていたのは私たちの方。「保護者をどんな相手と思っているのか」ということだったのです。

私たちは時に保育のプロとしての自分と、自分自身の人間性のはざまで揺れるのです。プロとしての責任を果たすこと、保護者の責任、親の責任を果たしてもらうようにすること。そんな保育士と保護者の関係が当たり前になりつつある世の中です。だけどそれではいつまでも“ともに”とはならず、責任を押し付け合う、評価の対象です。そうではなくて、お互いの重荷を少しずつ背負い合う関係の中で、ともに過ごし、ともに学び合うことこそが私たちの目指す保育園です。保育士としての視点は持ちつつも、一人の人間としてあなたとともに。それこそが私たちの専門性なのです。